

Special Essay

「この場合、拙速でもいい」

大学病院長 中島 格

昨年秋の久留米大学病院本館の開院にあたって、ある医学系新聞社から取材と原稿依頼があった。その時期は開院に関連して多くの原稿依頼がありうんざりしていただけない、「インタビューして、当方で記事を書きたい」という有り難い提案があり、原稿を書く労力が減ったと喜んで応じた。取材にきたのは M 新聞記者から転じた女性で、新病院の特徴や方針の後、個人的な紹介の取材になった。流石に準備がよく、前もって講座のホームページから私の自己紹介にも目を通してきたとのこと。座右の銘の「継続は力なり」や「人間万事塞翁が馬」よりも、新聞記者の彼女が最も気になったのは、「論文書きは拙速を尊べ」であった。彼女曰く、「一般新聞から転じて今は医学系新聞の編集を担当しているが、常に悩んでいるのが自分の遅筆であること」だという。職業柄、遅筆とは無縁な方とだけ思っていただけに親しみが湧いた。

以前書いたこともあるが、私もなかなか筆が進まない方であった。書かなくてはと分かっている、「週末こそ」とか、「この仕事を先に」と理由を探して後回しにし、自己嫌悪とむなしさが残ってしまう。「論文を書く」、「原稿を書く」ことは、決して楽なことではない。書き始めても、数行書くとすぐ席を立ててどうでもいい雑用をし、またおもむろに次の数行を書きつづける。

それでも何かの拍子になんとか最後まで書き終えることがある。拙くても書き終えるとひと仕事終えた快感を覚える。最近では、「どんなにまとまりのない文章でも、とにかく早く書き終えること。書き終えて形の成った文章に手を加えるのはそれほど苦痛ではない」と実感している。「論文書きは拙速を尊べ」に共感するのはこうした経験からで、その記者もおおいに共感してくれた。

あらためてこれを取り上げたのは、医学生時代の図書館で同じような行動パターンをしていたと感じるからである。試験を控えても勉強に身が入らず、医学図書館に行

くことが多かった。自宅より図書館が涼しく、学問的な雰囲気の中で勉強に身が入りそうな気がする。しかし、いざ図書館の一角でノートを広げるも、なんとなくロビーへ行って友人の姿を探す。腹が減っているわけでもないのに、間食にかこつけて館外へ向かう。結局、勉強がはかどったという満足感はなく、幾許かの自己嫌悪を覚えながら帰途につく。文章を書く時の行動パターンの原点がある。

でも学生諸君に伝えたい。論文を書くことと同じで、その中で時々集中し、効率の良い瞬間があるに違いない。一生の研鑽が要求される医師になるのだから、少なくとも図書館に身を置こうとする気持ちを、尊ぶべきなのだ。

